

天竜川の渡し舟と阿島橋

現在は座光寺から阿島へ行くには阿島橋があるので楽に行けます。橋のない時代には、舟で渡るが、大回りをして明神橋か弁天橋を渡っていました。川幅が広く阿島橋が出来るまでは大変な苦労がありました。橋が出来て時が経つとその苦労話も消え去ってしまいます。振り返ってみるのも大切なことだと思います。

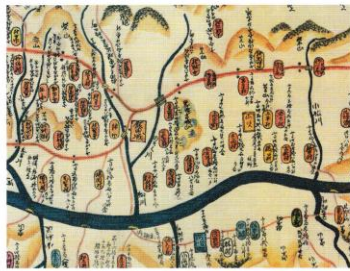
昔は天竜川をどのようにして渡ったか

古い時代には、泳いだり筏などを使って渡ったのかも知れません。堤防などない時代ですから、水の流れがいくつかに分かれていれば、冬の時期には歩いて渡ることが出来たかも知れません。天竜川の流れが折々変わるので、座光寺村や阿島村の耕地が入り合っていました。江戸時代には、耕作や薪運びのために「作舟」と呼ばれる小型な舟が使われていました。

渡船の始まり

飯田下伊那地方の渡船の始まりは古いようです。1472年(文明7年)に、下條氏が文永寺へ行くために船を造って渡ったとか、1533年(天文2年)に、京都の性院殿助という坊さんが、飯田から伊久間の渡船を使って、文永寺へ行ったという記録が残されています。

1645年頃(正保年間)伊那全体の絵図に、葛島・伊久間・知久平・今田舟渡が描かれています。舟賃を取って人々を渡す渡船として認められていました。御用渡しともいわれています。その近くで、舟賃を取る渡船が始めると争いごとがよく起こっています。



1645年(正保2年)伊那郡絵図の一部

座光寺・阿島の渡船

1754年(宝暦4年)に座光寺村と阿島村で相談し、それぞれの領主の許しを得て、渡船営業を始めた記録があります。両村で1艘づつ鶴飼舟(大型な舟)を造り、両側に舟小屋を設けて渡船稼業を始めています。ところが伊久間村から苦情が出ましたが、なかなか話が着きません。江戸まで行って貰かれて、過料(罰金)を支払われたこともありませう。その後も、作舟を使って渡船を続けたようです。

1869年(明治2年)になると、渡船稼業も自由になったので、座光寺村と阿島村で阿島渡船場を正式に始めました。座光寺村で15人、阿島村で12人の舟仲間によって、船頭2人ずつ交替で動いていました。座光寺・阿島共に2艘の舟を持っていたといわれます。明治の終わり頃から兩岸に固定したワイヤーと滑車を使った吊り越しという方式の渡船で、昭和10年過ぎまでは営業していました。水神堤防の原田さん宅の前あたりでした。下流には南条渡しもありました。

弁天橋と明神橋の間は長いのでよく使われた渡船で、如來寺の彼岸中日には多くの利用者があり、休業以後もお中日だけは渡船営業をしていました。



赤石登山道開発を計画して登山する北原米太郎一行(昭和4年)



昭和25年頃の座光寺・阿島の渡し舟

阿島橋の仮橋

太平洋戦争が終わって1948年(昭和23年)に、座光寺村と喬木村による「座光寺停車場・栗沢時又線連絡協議会」が結成されて、本格的な架橋運動が始まりました。ところが、この場所は広くて近くに橋があることから、実現が難しくありました。

そこで、県の補助金を受けて木の仮橋を造ることにしました。この木橋は阿島側を流れる本流に架けられ、座光寺側は河原を歩くものであって、1949年(昭和24年)5月に完成しました。ところが、昭和25年2月の大水で、本流が中瀬に移ったので、仮橋と渡船による通行が始まりました。またまた同年5月の大水害によって、阿島側の堤防が決壊して、仮橋も舟も流れてしまいました。

阿島橋の建設

1957年(昭和32年)になって、飯田市と喬木村による「阿島橋再建期成同盟」が発足して、県へ陳情が繰り返された結果、1964年(昭和39年)県企業局によって、「有料橋」として建設することが決まりました。その頃、有料橋というものは長野県では初めてのことであり、全国でも珍しい事でありました。兩岸の取り付け道路も新設されることになって、座光寺側では欠野の段丘面が掘り割られて、宮ノ前から天竜川緑まで直線の中河原の道路が、1965年(昭和40年)5月に開通し、同年7月には伊那谷の天竜川に架かる橋の中では一番長い橋がようやく完成しました。

通行料金は、料金表のように人の歩行は無料、自転車は10円、乗用車は100円でした。有料橋であったので車の通行が少なく、明神橋・阿島橋・弁天橋全体の通行量

の3.3%に過ぎなく赤字が続いたので、飯田市・喬木村・上村が協力費5800万円を県へ納めて、1974年(昭和49年)4月から無料になっています。

現在は、広域農道や国道153号線バイパス道路とも接続する重要な道路で、中河原も発展しています。



阿島橋開通式の渡り初め(昭和41年)



阿島橋料金徴収所

阿島橋通行料金表

車 輛 ノ 種 別	回 数	額	
		1回券	回数券
普通乗用車	100円	1,000円	徴収期間はこの条例施行の日から二十五年間
自動車	150円	1,500円	
小型二輪自動車	30円	300円	
自動車以外	80円	800円	
乗合型	200円	2,000円	
自動車	250円	2,500円	
大型特殊自動車	250円	2,500円	
軽自動車・小型特殊自動車	30円	300円	
原動機付自転車・軽運搬	20円	200円	
自 転 車	10円	100円	

(今村善興)

こうすい 天竜川の洪水はながったが

江戸時代から明治時代には、天竜川の洪水が数多くありました。時によれば、欠野や白山下まで浸水したことも度々あります。そこで苦渋して「石川除」を建設しました。現在水神堤防の長生橋を渡ると、外堤防の間に大きな建物が見えています。40年ほど前には想像のできない姿であります。座光寺では、1868年（明治元年）以降堤防が決壊したことがありません。昔の洪水の様子を知ること大切だと思います。



現在の阿島橋・観水公園・内堤防と外堤防（阿島橋両側の車の通れる所が内堤防、東側の白い建物の外側が外堤防）

昔は洪水が多かった

下伊那の郷土年表や北原家年代記によると、江戸時代の洪水・満水の記録は83回以上あります。記録の詳しいものは、1715年（正徳5年）から1868年（明治元年）の153年間に61回記録されているから、少なくとも2〜3年に1回は洪水があったことになります。

江戸時代の大洪水といえば、1715年の「正徳の未満水」がよく話題になります。満水というのは大洪水のことです。満水と記録されているものだけでも13回ありますから、度々大洪水があったことが分かります。

石川除の建設

川除というのは洪水を防ぐ施設のことです。竹籠（蛇籠）・聖牛・沈床・石の堤防・コンクリート堤防などがあります。座光寺の外河原は、青島・三角島・長生島・白山沖・畑ヶ島・水神島・中ヶ島・向島と呼ばれて、洪水の後、度々川除の普請が各所で行われています。記録に残る大きな普請は、1741年（元文6年）、1794年（寛政6年）、1799年（寛政11年）の中ヶ島・水神島・天島川渡の川除工事で、それに続く大普請は「石川除」です。

石川除というのは、割石積みの本格的な堤防のことです。1828年（文政11年）から1831年（天保2年）



聖牛



沈床

にかけて大工事が行われています。座光寺では、この石の川除を「石川除」と呼んでいます。この石川除は、何回かの大修理が行われて、1868年（明治元年）に完成しています。江戸時代に建設され、現存する石の川除としては、飯田下伊那地方ではほかにありません。



石川除

明治以降の堤防

1868年（明治元年）から9年までに、何回も大洪水が続いたので、下羽場の人たちを中心に、堤防建設が計画されました。村内や市田村・上郷村の賛成を得て、1888年（明治21年）から1904年（明治37年）にかけて外堤防の工事が行われています。市田・座光寺連合堤防・大平堤防です。内堤防といわれるのは、長生堤防・水神堤防・向島堤防・上郷座光寺連合堤防で、とくに、市田・座光寺連合堤防は外堤防の長い堤防で内堤防を護っています。昭和になって内堤防の水神堤防の嵩上げの工事や、その後の建設省による改修工事が行われて、座光寺の上河原・中河原地域を護り続けています。

三六災害

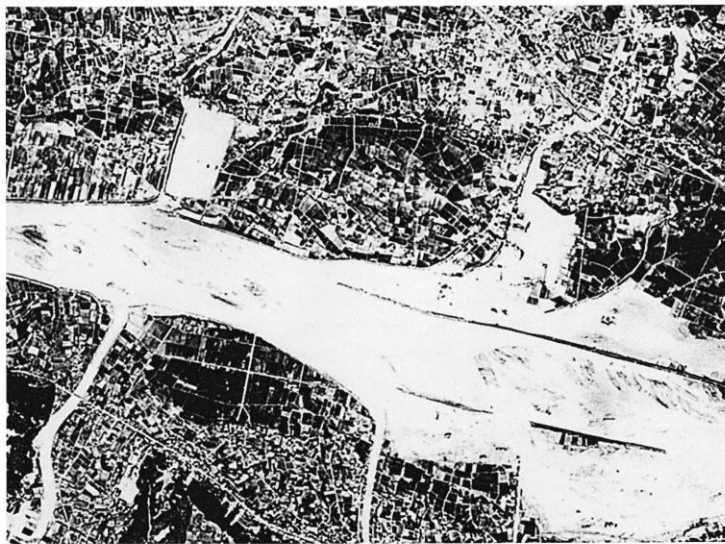
1961年（昭和36年）6月の梅雨前線豪雨は未曾有の大災害で、飯田下伊那地方全域が大きな災害を受けています。死者100人を越える大災害で、大鹿村の大西山が崩壊したり、天竜川では、高森町惣兵衛堤防・齋木村田中

下堤防・飯田市松尾弁天堤防など多くの堤防が決壊しています。座光寺の堤防は冠水したものの決壊は免れています。災害後の航空写真によると、南大島川と土曾川下流の土砂災害や外堤防・内堤防の冠水の状況がよく分かります。その後の復旧作業により、それぞれの堤防が修復されたり、阿島橋の新設などにより外川原が整備されて観水公園の基盤ができています。

（今村善興）



土曾川尻の水害（昭和32年）



三六梅雨前線豪雨による河原地区の被害